

選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

選者コメント

1. 『初稿・山海評判記』 泉鏡花著 小村雪岱画 田中勲儀編 国書刊行会 2014

◆ときに出版界が空前の「ふしぎ文学（怪談／幻想文学）ブーム」を迎えていた昭和4年（1929）——天才・鏡花が「お化け好き」の盟友たる柳田國男との熱き交流に触発されるがまま、構想執筆した大作「山海評判記」。新聞連載時、奔放自在にして幻妖怪美な物語には、天才・雪岱による挿絵とカットが、毎回さまざまな趣向を凝らして描き下ろされた……。

雪月花ならぬ、大いなる「雪」と「柳」と「花」のコラボレーションによって誕生しながら、初出このかた埋もれたままになっていた雪岱の挿絵とカットを全点復刻し、物語の進展に沿って配した本書には、文学と美術と民俗学が「お化け」を接点に結びつき、空前の高みに達していた黄金時代の狂熱と幻視が、濃厚に湛えられている。

秋の夜長、ゆるゆるとページを繰れば、鏡花の奇想と雪岱の幻視が交錯し、「山海評判記」の謎めいた世界が、これまでとは段違いの衝撃と美的陶醉をともなって、眼前に立ち顕われることだろう。心ゆくまで読み耽り、眺め耽るための一冊。

ちくま文庫版『山海評判記／オシラ神の話（柳花叢書）』と併読すれば、作品の背後に黒闇々と蟠るシャーマニックな土俗世界に、さらなる関心を掻きたてられるに違いない。

2. 『物語と舞踏』 森繁哉著 れんが書房新社 2012

◆今年8月、お盆の時期に、新潟県の十日町で「越後里山怪談」を開催した。同地の「松代郷土資料館」館長であり、舞踏家としてもユニークな活動を展開している森繁哉さんとのコラボレーション企画（主催は越後里山機構）であった。

「越後、里山、草迷宮。／この世とあの世が出逢う場所」を合言葉に、里山の豊かな自然に見え隠れる異界との接点、そこに顕現する「ふるさと怪談」を探求してみようという試みである。

打ち合わせの席で、森さんに囁かれた——「ヒガシさんも、一緒に舞台に立ちませんか？」

巫座チームによる詠唱のお手伝いをすればよいのだろうと気軽にお引き受けしたら、なんとまあ、「説教師」という配役で、『葛の葉子別れ』にちなんだ「語り」と「歌」を相務めるという大役を仰せつかったのであった。

森さんの的確な御指導を得て、どうにかこうにか務めたものの、全くもって冷汗ものだった。

とはいえ、実際に自分も舞台に立つことにより、「芸能」というものの本質に一步、これまでより接近できたのは、大きな収穫であったと感謝している。

本書は、そんな森繁哉さんの45年余に及ぶダンス・ワークの記録であり、多くの示唆と発見に富むエッセイ集でもある。修験の家に生まれ、山形県奥地の大蔵村に長らく腰を据え、地霊と交感し村の人々と交感する舞踏家は、一方で文学や民俗学にも独自の見識を有する在野の学究でもある。

ふしぎ文学の大いなる源流もしくは母胎ともいふべき民俗芸能が蔵する、豊饒幽暗な物語世界を探究する人々にとっても、本書は多くの示唆と励ましを与えることだろう。同時刊行された『生命と舞踏』とともに是非。

3. 『幽霊さん』 司修著 ぶねうま舎 2014

◆今年の7月に平凡社ライブラリーから『可愛い黒い幽霊 宮沢賢治怪異小品集』を上梓した。2年前から、年に1冊ずつ手がけている〈文豪小品〉アンソロジー・シリーズの最新刊である。

一般には童話作家、農村詩人のイメージが強い賢治だが、彼の作品には韻文散文を問わず、幻視や幻聴、さらには怪異体験と呼ぶほうが相応しいような異様な世界を、喚起力に優れた文体で活写した作品が、実は少なくない。それらを「幽霊の章」「幻視の章」「鬼言の章」「物怪の章」「魔処の章」という五つのセクションに配し、巻末解説では、友人知己が書きとめていた、賢治本人の心霊体験談を紹介している。

画家、絵本作家、小説家、装幀家……多彩な顔をもつ司修の最新短篇集である本書の表題作「幽霊さん」は、東日本大震災の被災地を舞台に、連れ合いを津波で喪った老婆が、宮沢賢治と出会い、対話を交わす作品である。その中には、私も解説中で紹介している、小鬼と巨大な手の目撃談が活かされていて、不思議なシンクロニシティに驚かされた。

「被災地の幽霊」は、昨年放送されたNHKのドキュメンタリー番組「亡き人との“再会”」や、いとうせいこうの小説『想像ラジオ』などのテーマとなって、すでに人口に膾炙しているけれども、この「幽霊さん」ほど哀切に、しかも「見霊者」としての賢治が登場することからも分かるように、「みちのく」の伝承的過去をしっかりと踏まえて、書き綴られた物語を、私は他に知らないのである。

4. 『怪談四代記 八雲のいたずら』 小泉凡著 講談社 2014

◆近代日本における「ふしぎ文学」の歴史を顧みるとき、その黎明期にあって多大な貢献をなした文豪のひとりに、青い目の日本人・小泉八雲ことラフカディオ・ハーンがいる。

名高い『怪談』『骨董』や『知られぬ日本の面影』は云わずもがな、八雲は教育者としても、東大英文科での熱血講義において、「夢と幽霊」の文学の重要性を明治のエリートたちに説き聞かせ、大正～昭和初期における怪奇幻想文学黄金期の礎を築いた。

没後110年となる今年——小泉八雲の文業に新たな光を当てる動きが、にわかにも高まりを見せている。

たとえば目下、怪談専門誌「幽」で連載中の円城塔訳『怪談』連作は、「ゼン派の僧侶であるムソー・コクシは、ミノ地方をひとり旅する」云々といった具合に、徹底して西欧人の視点に立った訳しぶりによって、従来の八雲翻訳では見えてこなかった「もうひとつのヤクモ世界」を開示するエキサイティングな試みだ。

また、能楽師の安田登や講談師の玉川奈々福らによる「耳なし芳一」の公演も、これまでの芳一物語の解釈を根底から覆す問いかけをひそめて、きわめて刺戟的であった。

初刊本での配列や原註の再現にこだわった平川祐弘訳『骨董・怪談』もある。

八雲の曾孫にあたる民俗学者・小泉凡が書き下ろした『怪談四代記 八雲のいたずら』は、そうした一連の八雲再評価の機運に、さらなる決定的一石を投ずるに違いないエッセイ集にして怪談実話集である。小泉家に数度にわたる転居を余儀なくさせた如意輪観音像の呪い、八雲の名訳者にして泰西怪奇小説翻訳の名匠としても知られた平井呈一との交流など、ふしぎ文学ファンならば、思わず膝を乗り出さずにはいられない話題が満載の快著／怪著である。

5. 『成田亨作品集』 成田亨著 羽鳥書店 2014

◆久方ぶりに巡ってきた「ゴジラのいる夏」を、心静かに回想するに最適な1冊を。

今回のレジェンダリー版『ゴジラ』の敵役ムービーにせよ、昨年（一部で）話題を呼んだ『パシフィック・リム』のカイジウたちにせよ、それなりに優れた怪獣デザインではあるのだが、われわれ日本のウルトラ世代は、心のどこかで「何かが足りない！」と叫んでしまう……その理由が、この大部な図録には、十全に開示されている。

そう、成田亨あればこそ、日本には、世界に稀有な「怪獣」という文化が誕生したのである。

怪獣文化の系譜については、たとえば雑誌「幻想文学」39号の「大怪獣文学館」で跡づけたことがあるが、やはり「成田亨以前／以後」の質的变化は大きい。

古代の神話と20世紀の前衛美術が、事もなげに融合され、誰も予期しえない奇趣横溢の造形へと変容を遂げる。少年時代のこよなき「朋友」であった、あのバルタン星人やケムール人やガラモンが、実はモダンアートの本流と不即不離の関係にあることが、本書をひもとくことで了解されよう。これは（当事者ゆえにふだんは無自覚なのだが）実のところ、真にファンタスティックな、驚くべき事態だったのではないかと、更めて思う。

個人的には「未発表怪獣」の数々が一挙掲載された第7章に、清新な驚きを味わった。

なお、3・11後における怪獣文化を考えるうえで、赤坂憲雄の新刊『ゴジラとナウシカ』もまた、必読の書である。

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

1. 『ひだりききの機械』 吉岡太朗著 短歌研究社 2014

選者コメント

◆刺激的で、爆発的で、戦闘的で、好戦的で、挑発的で、スラップスティックで、ちょっと下品で、ちょっとセンチメンタルな歌集。

「南海にイルカのおよぐポスターをアンドロイドの警官が踏む」「そのたびに泥がこぼれる図書館の本の着ぐるみ剥いださかな」「傘を打つたびに雨からあまおとが剥がれていつか死ぬ身をわしは」「もおきみはうつくしいばか髪のをみみたぶごとなめるな」

歌壇に超新星誕生。

2. 『海うそ』 梨木香歩著 岩波書店 2014

◆『家守綺譚』が梨木香歩の最高傑作なら、本作はふたつ目の最高傑作だと思う。

「その地名のついた風景の中に立ち、風に吹かれてみたい、という止むに止まれぬ思いが湧いて来たのだった。決定的な何かが過ぎ去ったあとの、沈黙する光景の中にいたい。そうすれば人の営みや、時間というものの本質が、少しでも感じられるような気がした。」

3. 『窓から逃げた 100 歳老人』 ヨナス・ヨナソン著 柳瀬尚紀訳 西村書店 2014

◆百歳の誕生日に老人ホームを脱走したアランはチンピラからジャンボ宝くじなみの札束の入ったバッグをくすねて、警察と犯罪組織から追われるはめに。その顛末が語られる一方、彼の半生が語られる。スペイン革命でフランコ将軍の命を救い、ロスアラモスの国立研究所でオッペンハイマーにグッドアイデアを提供し、トルーマンに頼まれて、中国での橋梁爆破を引き受け……。100 年にわたる半生と、100 歳からの大冒険？！

4. 『怪奇小説日和 黄金時代傑作選』 西崎憲編訳 筑摩書房 2013

◆『ゆみに町ガイドブック』などの浮遊感漂う作品を次々に発表して独特のジャンルを広げている西崎憲は、じつにマニアックなアンソロジストでもある。そのセンスがいかに発揮されているのがこれ。時代がかった大仰なゴシック・ロマンスと、いかにも現代的な生々しさをつきつけるモダンホラーの中間に位置する、怪奇小説（ゴースト・ストーリー）の傑作・異色作が 18 編。巻末にそえられた 36 ページにわたる解説がまた素晴らしい。

5. 『ディオニュソスの蛹』 小島てるみ著 東京創元社 2014

◆画才に恵まれた 18 歳のアルカンジェロと、アートディーラーをしているその兄レオンの愛憎。これに、牛頭人身の怪物ミノタウロスの神話が重なる。迷宮で、「殺される神」ミノタウロスは殺されては孕まれ、生まれては犠牲として殺される。生きのびることは禁忌なはずのミノタウロスが生きのびようとするとき、すべてが変わる。アルカンジェロとレオンとミノタウロスの激しい物語。幻想文学のおもしろさを凝縮したような作品。

選者：島田尚幸氏（あいち妖怪保存会代表）

選者コメント

1. 『かがみのなか』（怪談えほん6） 恩田陸作 樋口佳絵 東雅夫編 岩崎書店 2014

◆鏡が怖いと思ったこと、ありませんか？旅行先の旅館で。夕方の学校で。誰もいない公衆トイレで。身の回りにごく当たり前にあるにも関わらず、特別な存在感をもつ道具。“虚”・“実”の境界線を形成する特別な道具。それが鏡です。

では、境界線の向こう側、光の届くことのない「向こう側」には何が待っているのでしょうか。絵と文、それぞれが描き出すもう一つの世界に、どうぞ引き込まれて下さい。

2. 『人魚なめ』(江戸マンガ2) 棚橋正博監修 小学館 2014

◆食べると「不老不死」になると言われる人魚の肉。

その人魚を一口舐めたら…?でも、人魚の立場で見たら、どんな気持ちで舐められる…?

昨今、ゲームやアニメ、マンガに小説様々な世界で「妖怪」が大活躍しています。しかし、妖怪キャラが面白おかしく活躍するようになったのは、今に始まったことではありません。人魚をはじめ、妖怪ちゃん達が生き活きと生活する江戸の町を、一口といわずどうぞたっぷりご賞味あれ。

3. 『おはなしして子ちゃん』 藤野可織著 講談社 2013

◆ホルマリン漬けの猿、人魚の木乃伊、嘘をつく少女…可愛くて、繊細で、どこかグロテスクな物語。

日常に潜む非日常を扱うから怖い、という物語は沢山あります。しかし、筆者が描くのは「非日常の中の日常」。どこかがおかしく、どこかが狂った、それでも紛れもない日常。読み進める中で、座りの悪い厭な感覚が少しずつ沁み込んでくるのではないのでしょうか。まるで、体中の水分がホルマリンに置換されていくかのように、じわじわと。

4. 『実録四谷怪談 現代語訳「四ッ谷雑談集」』 広坂朋信訳注 白澤社 2013

◆怪談が好き。「四谷怪談」もなんとなくは知っている。そんな人にぴったりな一冊。

これを読んで、鶴屋南北の「東海道四谷怪談」、京極夏彦の「嗤う伊右衛門」に入れば、作品世界の幅がより大きく広がります。それらを知った上で読むと、また芝居が見たくなり、また物語を読みたくなる。そんな気持ちにさせられること請け合いです。

同シリーズの「死霊解脱物語聞書」もおすすめ。

5. 『日本怪異妖怪大事典』 小松和彦監修 小松和彦ほか編 東京堂出版 2013

◆この事典は、所謂「妖怪事典」とは異なります。「ぬらりひょん」も「魍魎」も、「わいら」も載っていません。でも、「ろくろ首」や「河童」、「一反木綿」は載っています。

この差はどこにあるのでしょうか。様々な見出を手繰り、この事典で用いられた「妖怪」のもつ意味、対象を探ることで、現在使われている“妖怪”という言葉／概念を知る手掛かりが見付かるかも知れません。

“妖怪とは何か”を知りたい人に、おすすめの一冊です。

選者：内浦有美氏（ばったり堂・店主）

1. 「河童」（『河童・戯作三昧』に収録）芥川龍之介著 角川書店 2008

選者コメント

◆最近、日常の会話の中で、相槌を打つときは“Qua”（河童の国の言葉で“然り”“もちろん”という意味）、驚いたときは“quack”（感嘆詞）と内心でつぶやきます。時々、口からぼろりと出てしまうときもあります。

～河童「十七」より～

ただそれでも困ったことは何か話をしているうちにうっかり河童の国の言葉を口に出してしまうことです。

「君はあしたは家にいるかね？」

「Qua」

「何だって？」

「いや、いるということだよ」

大体こういう調子だったものです。

2. 『片身のスズキ 豊橋の民話』豊橋の民話を語りつくす会 2006

◆吉田城主への献上用の刺身に片身をおろされてしまった豊川の鱸の話、洞窟に棲まう蛇の老婆の話、本宮山と石巻山が背比べをしてけんかする話、だいだらぼっちの足跡やおしっこが山や川になった話…。私たちが住んでいるこの土地では、昔から“ふしぎ”な出来事が身近にたくさん起こっていて、人々はそれらを受け入れ、時に畏敬し、愛おしみ、教訓にして、生活の中に取り込んでいきました。なかでも一番の“ふしぎ”は…と個人的に思うのは、こうした“ふしぎ”が何百年も人々の口から口に語りつがれてきたそのこと自体ではないでしょうか。驚きと尊敬を隠せません。

3. 『夢十夜 他二篇』夏目漱石著 岩波書店 2007

◆祖母が亡くなる前日、桔梗が一輪、綺麗に咲きました。淡い紫色の蕾が割れて少しずつ花卉が開いていく様子を、祖母と私の二人で見ていると、「きれいだねえ。明日、この桔梗を絵手紙に書きたいな」と、祖母がうれしそうに言いました。それから四日が経ち、彼女の葬儀が終わった翌朝、次の一輪が咲きました。家族が一人欠けた食卓を元気付けるかのように、淡い紫色の花卉がしなやかに開いていきます。「わたしも一緒に朝ごはんを食べるよ」祖母の声が聞こえた気がしました。

～夢十夜「第一夜」より～

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐っていると、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますという。女は長い髪を枕に敷いて、輪廓の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、唇の色は無論赤い。到底死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然いった。

4. 《ハリー・ポッター》シリーズ 全7巻

- 『ハリー・ポッターと賢者の石』J・K・ローリング著 松岡佑子訳 静山社 1999
『ハリー・ポッターと秘密の部屋』J・K・ローリング著 松岡佑子訳 静山社 2000
『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』J・K・ローリング著 松岡佑子訳 静山社 2001
『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(上下) J・K・ローリング著 松岡佑子訳 静山社 2002
『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(上下) J・K・ローリング著 松岡佑子訳 静山社 2004
『ハリー・ポッターと謎のプリンス』(上下) J・K・ローリング著 松岡佑子訳 静山社 2006
『ハリー・ポッターと死の秘宝』(上下) J・K・ローリング著 松岡佑子訳 静山社 2008

◆この夏、本棚の奥にしまってあった『ハリー・ポッターと賢者の石』を何年かぶりに引っ張り出しました。“ちょっと魔法の世界へ” くらいの気軽さで。頁を開いて、ああ、と後悔。「“ふしぎ” は私たちの世界と同じ質量と質感をもって、存在している」。覚悟をもって一緒に冒険に出かけねば、と背筋を伸ばした一冊です。

5. 『ゼロになるからだ』 覚和歌子著 徳間書店 2002

◆『千と千尋の神隠し』の主題歌「いつも何度でも」の作詞者・覚和歌子氏の作品集。この歌詞に出会ったときに、生れてはじめて“ふしぎ”を意識したことを鮮明に覚えています。いまでも、どうしようもない気持ちになったときに、そっと口ずさみます。

～「いつも何度でも」より～

呼んでいる 胸のどこか奥で
いつも心躍る 夢を見たい

かなしみは 数えきれないけれど
その向こうできっと あなたに会える

繰り返すあやまちの そのたび ひとは
ただ青い空の 青さを知る

果てしなく 道は続いて見えるけれど
この両手は 光を抱ける

さよならのときの 静かな胸
ゼロになるからだ が 耳をすませる

生きている不思議 死んでいく不思議
花も風も街も みんなおなじ



- ・リストの20冊（シリーズ含む）は、田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。
 - ・過去のブックリストは、中央図書館2階「泉名月記念ふしぎ図書館」にあります。
- 2014.10 作成